

1 つれなき麗しの妖精

I.

おお 何がそなたを苦しめる 哀れな姿で  
ただひとり 顔蒼ざめて彷徨うは  
菅草は湖の辺に萎れ果て  
歌うたう 鳥もなし

II.

おお 何がそなたを苦しめる 哀れな姿で 5  
かくやつれ かく苦しむは  
栗鼠の穀倉は 蓄えに満ち  
収穫は いまや了りぬ

III.

そなたの額は 百合の花色に染まりゆき  
苦悶に濡れ 熱き玉汗にじみ出ず 10  
そなたの頬の 薔薇の花色移ろいて  
瞬く間もなく 萎れて果てぬ

IV.

草原にめぐり逢いしは ひとりのおかた  
いと麗しく さながら奇しき妖精のごと  
そのかたの御髪はなびき 御足は軽く 15  
そのかたの御目は怪しき

V.

たく足に進む駿馬にそのかたを乗せ  
ひもすから ほかに目移ろうことぞなし  
かたわらにそのかたは身を寄せ 歌うたう

VI.

そのかたの頭に われは花輪捧げぬ  
花の腕輪 花香る飾り帯も  
そのかたは 恋するごとくわれをみつめて  
甘き呻きの声こそ 発てぬ

VII.

そのかたは われにみつけぬ 25  
甘き草の根 野の蜜とマナの露  
不思議な言葉で 紛うかたなくそのかた言いぬ  
「真実 そなたを愛しています」

VIII.

そのかたは 奇しき洞穴にわれを誘ない  
してそこで われを見つめて深きため息 30  
われは 優しき接吻をもて  
そのかたの 怪しき悲しき臉を閉じぬ

IX.

してそこで 苔むす石を枕に二人して眠りにおちぬ  
われは夢みぬ ああ 呪わしき夢  
今しがた 夢みし夢よ 35  
冷たき丘の中腹で

X.

われは夢みし 青ざめし王や王子ら  
青ざめし兵士ら みな死人のごとく蒼白く  
彼ら叫びぬ 「つれなき麗しの妖精  
そなたを捕えぬ！」 40

XI.

われは見し 黄昏の中彼らのやつれし唇が  
忌まわしき警めをもて うち開かるを  
してわれは 目覚めてここにわれを見ぬ  
冷たき丘の中腹に

XII.

しかしてわれはここにあり  
ただひとり 顔蒼ざめて彷徨いつ  
菅草は湖の辺りに萎れ果て  
歌うたう 鳥もなけれど

45

(山中光義訳)